

学位記番号	※ 第 59 号
-------	----------

主 論 文 の 要 旨

論文題目 専攻学問に対する価値と学士課程における学習成果との関連

氏 名 松本 明日香

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は5章構成で、第1章は序論、第2~4章では研究1~6に基づき専攻学問に対する価値と学士課程の学習成果の関連について検討した。第5章は総合考察である。

鹿毛(2013)は、学習意欲を「状態レベルの動機づけである『学びたいという欲求』と『その学修に関連する諸活動を成し遂げようとする意志』の複合的心理状態である」と定義している。学習動機づけ研究において、長年研究対象となっている概念の1つに、学習対象に対する「価値」がある。その中で価値の種類に焦点を当てた「課題価値」という概念が提唱されている。Eccles & Wigfield(1985)が、ある課題に取り組む際の動機づけの価値的側面を概念化したものが課題価値であり、課題価値は、学習動機づけにおける「価値」の種類や中身を精緻化したものである。課題価値には、興味価値、利用価値、獲得価値の3種類の下位側面があるとされている。日本では、伊田(2001)がEccles & Wigfield(1985)の課題価値の下位側面をさらに細分化し、利用価値、獲得価値をそれぞれ2種類に分類して、興味価値、実践的利用価値、制度的利用価値、私的獲得価値、公的獲得価値の5つに分けている。1つ目の興味価値は、ある課題に従事することによって楽しさや充実感を得られるという価値であり、Eccles & Wigfield(1985)と同様の定義である。2つ目、3つ目は実践的利用価値と、制度的利用価値である。そもそも利用価値は、「ある内容を学習することが将来の職業的な目標の達成に寄与する」という価値である(伊田, 2001)。伊田(2001)はこの利用価値を2つの下位側面に分割した。学習内容について、将来の職業的な実践において有用性があると認識される場合の価値である実践的利用価値と、就職、あるいは進学の実験に合格するために、その学習の内容が必要であるという価値である制度的利用価値の2種類である。実践的利用価値は「職業実践という予期的活動と内容的に関連している場合に認識される価値」であり、制度的利用価値は「職業実践との直接的な関連性ではなく、あくまで進路目標を達成するための手段性」を意味する(伊田, 2002)。4

つ目、5つ目は、私的獲得価値と公的獲得価値である。私的獲得価値は、「ある内容を学習することが、自分自身が望ましいと考えている自己像の獲得につながること」、つまり「その課題に取り組むことによって、なりたいたいと思っている自分に近づくとか、自分自身が成長すると感じられることを意味する価値」である。公的獲得価値は「ある内容を学習することが他者から見て望ましいと（本人が）認知している」といった価値である。課題価値には下位側面が存在するものの、学習内容や学習成果、動機づけの各側面への下位側面ごとの効果や各下位側面の組み合わせの効果に関する研究は少ない。解良・中谷（2014）は、課題価値は下位側面ごとに動機づけや学習行動に対する影響が異なる可能性があるにもかかわらず、下位側面の機能に関する検討は不十分であることを指摘している。

本研究は、大学の専攻学問を課題価値の「課題」とする「専攻学問に対する価値」について検討を行う。先行研究においては、特定の科目を想定したものが主であるが（伊田，2001；大谷，2013 他），学士課程教育という観点から課題価値を考えた場合，特定の科目や講義だけでなく，自身の所属する学部・学科の学習内容，あるいは専攻する学問分野を「課題」とした課題価値が存在すると考えられる。Eccles & Wigfield（1985）や伊田（2001）による課題価値の概念と照らし合わせ専攻学問に対する価値を定義すると，専攻学問に対して，学習者がどのような価値を求めるのか，現在学習している専攻学問に対してどのような価値評定をしているのか，ということになる。これは自身の専攻学問に対する個人的な意味づけを指すといえる。そこで本論文では，専攻学問に対する価値と，学士課程における学習成果との関連を検討する。久保田（2013）は，学士課程教育の学習成果は，特に産業界から求められるような汎用的なスキルが多く含まれているが，大学は学びの場であるため，汎用的な力の育成に特化した取り組みで育成されるよりも，学問分野の内容を通じて育成されたものが，職業場面でも汎用性を持つことが望ましいと述べている。また，学士課程教育では，大学の教育上の目的に即し，専門分野の学習を通して学生がいかに学習成果を獲得できるかを考えるべきであるとされている（日本学術会議，2010）。つまり，専攻学問の学びを通じた学習成果の獲得の重要性が，昨今強調されているのである。鹿毛（2013）は，学習対象に対して当人が何らかの価値を感じなければその学習に対して意欲的にはならないと述べている。学士課程内での専門的な学びを通じた学習成果の獲得について，「専攻学問に対する価値」に焦点を当て学習成果との関連を検討することは非常に意義深いといえる。

以上のように，第1章前半では，課題価値研究に関する知見を概説し，「専攻学問に対する価値」に関する研究を行うことの重要性について論じた。第1章後半では，専攻学問に対する価値と学士課程における学習成果の関連を検討する意義を示したうえで，学士課程における学習成果の概念整理を行った。

第2章では，研究1，研究2に基づき，専攻学問に対する価値の下位構造の確認お

よび批判的思考力との関連について論じた。これまでの研究では、課題価値の「課題」にあたる対象は特定の授業、講義であることがほとんどであったため(伊田, 2001 他), 本論文で取り上げる専攻学問に対する価値は従来の課題価値と同様の興味価値, 利用価値, 獲得価値といった下位側面に分類可能であるかを確認する必要がある。900名の大学生に対し調査を実施した結果, 専攻学問に対する価値は興味価値, 利用価値, 私的獲得価値, 公的獲得価値という4つの下位因子で構成されることが示された。研究2では, 学士課程における学習成果の1側面である批判的思考力との関連を明らかにした。批判的思考力として, 質問力, 質問態度, クリティカルシンキング志向性を測定し, 専攻学問に対する価値との関連を検討した。分析の結果, 以下の2点が明らかとなった。1点目は, 専攻学問に対する価値の複数の下位側面と, 批判的思考の態度の側面および事実を問う質問生成数, すなわち批判的思考の基礎力に該当する側面との正の関連が示されたことである。2点目は, 興味価値の高さと公的獲得価値の低さが, クリティカルシンキング志向性および, 質問力のうち浅い質問生成数, 深い質問生成数双方と関連していたことである。すなわち, 専攻学問に対する価値は, 批判的思考力にとって有効であることが明らかにされた。

第3章では, 専攻学問に対する価値とキャリアおよび日常生活に関する側面との関連を研究3, 研究4に基づき検討した。研究3では職業志向性を, 研究4では大学生生活充実度をとり上げ, 専攻学問に対する価値との関連をそれぞれ検討した。分析の結果, 研究3では興味価値, 利用価値, 私的獲得価値が高いと, 人間関係や職務挑戦を重視し, 労働条件を軽視した職業選択をしようとすることが示された。興味価値, 利用価値, 私的獲得価値は自律的な学習動機づけ像を構成する要素であることが指摘されており(伊田, 2001), 専攻学問に対する自律的な価値の高さは, 適応的なキャリアに関する意識と関連することが明らかとなった。また, 利用価値と公的獲得価値の高さが全ての職業志向性と正の関連を示しており, 専攻学問に対するメタ認知的な視点を含んだ価値と, 就職に対する多様な志向性との関連が示唆された。研究4では, 大学生生活充実度に関して, 4つの価値すべてと学業満足および大学コミットメントの高さとの関連が示された。すなわち, 自身の専攻学問に対して多面的に価値を見出していることと, 学業への満足感を中心とした「現在の大学に所属していてよかった」といった満足感との密接な関連が示された。また, 利用価値や公的獲得価値といった, 他者や社会からの有用性に関する価値と, 大学での学び以外の側面, 特に友人関係への満足感を中心として成り立つ大学への満足感および所属意識とが関連しているということがわかった。一方, 利用価値, 公的獲得価値と大学に対する不安のなさが強く関連しており, 利用価値は正の, 公的獲得価値は負の関係性を示していた。公的獲得価値と利用価値は, 他者や将来といった外発的な側面を持つ価値である。他者から見た専攻学問の学びに対する価値の認知と, 自身が持つ, その学問の社会的な意義に関する価値が主観的に一致していない状態は, 大学生生活に対する不安意識と関連するこ

とが示唆された。

第4章では、まず研究5に基づき、大学3年次に開講される専攻学問とキャリアについて考える授業が、専攻学問に対する価値に影響を及ぼすことを明らかにした。専攻学問に対する価値を、授業前、授業直後、授業終了5か月後の3回、縦断的に測定し、専攻学問に対する価値の変化について分析を行った。結果、授業直後には、専攻学問に対する価値のうち、興味価値、利用価値、私的獲得価値が向上することが示された。自らの学部の学修目標を再確認させ、専攻学問の学習を通じて身に付く力や社会で役立つ力の関連を示しながら将来のことを意識させる講義は、専攻学問に対する価値の向上に一定の効果があることが明らかとなった。次に研究6では、大学4年間の専攻学問に対する価値の縦断的な変化について検討し、興味価値、利用価値、私的獲得価値は入学時が最も高いこと、またこの3つの価値は3年次に低下するが、卒業時に再度高まることが明らかになった。特に、利用価値は、卒業時において入学時と同等まで上昇していた。なお、専攻学問を学ぶことは、周りから意義があると認識されているという価値である公的獲得価値のみ、入学時に最も低く、3年次に上昇し、卒業時まで変化しないという、他の3つの価値と異なる傾向を示していた。

第5章では、専攻学問に対する価値と学士課程における学習成果の関連および、専攻学問に対する価値の変化に関して総合的に考察をした。本研究は、以下の3点が特に有意義であったと考えられる。1点目は、課題価値を「専攻学問」という観点から捉えなおし、専攻学問に対する価値という概念を整理した点である。2点目は専攻学問に対する価値と学士課程における学習成果の関連について、専攻学問に対する価値の下位側面の組み合わせによる効果を示すことができた点である。研究2、研究3、研究4の結果から、専攻学問に対する価値の、学士課程における重要性を強調することができたといえるだろう。特に公的獲得価値に関しては、他の価値の高さの違いによって、学習成果との関連が正、負逆転するという特徴的な結果を示していた。この結果は、伊田（2003）で示された結果と整合している。本論文は、学士課程における学習成果という側面との関連においても、公的獲得価値の特異的な特徴を示したということで、課題価値研究の知見の蓄積に貢献できたといえるだろう。3点目は、学士課程における、専攻学問に対する価値の介入効果に関してである。課題価値の介入効果に関する先行研究においては、比較的長期間にわたる、講義による介入実践の効果を検討したものが多かったが、研究5では2日という短期間の実践の効果をとり上げ、また研究6では「学問を修める」という4年間の大学生活の中での価値の変化を取り上げた。これらの結果から、学士課程の教育の在り方および、学士課程の学びに対して価値を見出すことの新たな視点を示すことができたといえるだろう。